氏　　名	五十嵐　淳子
学 位 の 種 類	博士（英語学）
学 位 記 番 号	甲第１６号
学位授与年月日	２０２２年３月１９日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当（課程博士）
学 位 論 文 題 目	幼児を取り巻く英語環境－未就学児の英語教育を通して－
論 文 審 査 委 員	委員　　教授　柳　　善和
	委員　　教授　城　　哲哉
	外部審査委員　　深澤　清治
	外部審査委員　　築道　和明

審査結果の要旨

五十嵐淳子氏による本論文は、「幼児を取り巻く英語環境－未就学児の英語教育を通して－」と題して、子どもの英語教育に関する先行研究と幼稚園や保育園、幼児英語教室の英語活動の観察及びインタビュー調査の質的研究と幼児教育・保育の現場、保育者養成校における量的調査を基に、未就学児に焦点をあてて幼児を取り巻く英語環境について調査したものである。これらの調査から、幼児教育における英語教育の意義を論ずることで未就学児の英語活動のあり方の新たな方向性を得ることを目的としている。

研究課題として次の 5 つを設定している。(1)幼児教育の現場(幼稚園・保育園・幼児英語教室等)では、どのような英語活動を行っているのか。(2)幼稚園教諭及び保育士が幼児の英語活動に対してどのような考えを持っているのか、幼稚園教諭及び保育士自身は英語に対してどのような意識があるのか。(3)幼児教育の現場に携わる保育者(管理職を含む)や英語教師がどのような考えで幼児期の英語教育に取り組んでいるのか。(4)保育者を目指す学生は未就学児の英語教育にどのような考えを持っているのか、学生自身の英語環境はどのような状況なのか。(5)幼稚園及び保育園の保護者は、子どもの英語教育にどのような意識を持っているのか、保護者自身の英語環境はどのような状況なのか。

以上の研究課題に対して、全国の様々な施設において、量的・質的な調査を行い、その結果が詳細に記述されている。

(1)については、①保育時間外に英語活動を実施している施設、②保育時間内に実施している施設、③英語教師が常勤している施設、に状況が分類できることを示し、その一方でいずれの環境でも子どもたちが英語活動を楽しんでいる様子が確認できたとしている。(2)については、幼稚園教諭及び保育士は英語の苦手意識を持っているが、英語を話せるようになりたいという強い気持ちは持っていること、しかしその一方で、自

身が英語活動に取り組むことには負担が増加する事への懸念が見られるとしている。(3)については、管理職は幼児期の英語教育に対して異文化理解の意識を育むことも含めて積極的であり、保育者も子どもたちに英語の学習を楽しんでほしいという意識を持っているとしている。(4)については、保育者養成校では、英語が苦手な学生が多く、普段の生活で英語を使う機会が少ない現状であるとしながら、英語の必要性は感じており、幼児の英語活動を扱う授業などを導入していく必要があるとしている。(5)については、約 7 割の保護者が就学前教育における英語教育に肯定的な意見を持っているとして、さらに英語活動の時間に英語母語話者が担当することで、子どもたちが英語に触れることを通して異文化、多様性の理解につながることを望んでいるとしている。

これらの結果を踏まえた今後の課題として、(1)英語活動における保育者の役割、(2)保育者の研修、(3)英語活動の評価、を挙げている。(1)については、英語教師と保育者の両方が英語活動を担当する場合には、保育者がこどもたちの安全に気を配りながら活動が進められるが、現状では英語教師と保育者が事前に打ち合わせをする時間が十分に取れていないことが多く、そのためにお互いの意図がかみ合わない場合が多く見受けられるとしている。これについては、(2)の課題とも関係している。すなわち、保育者の仕事が忙しく、十分に研修の時間が取れていないことが問題であり、この点の改善が望まれる。これは、英語活動についてばかりでなく、保育者の業務全体に関わる領域でも言えることではないかと考えられる。(3)については、それぞれの施設で想定している英語活動のねらいがどれだけ達成できているかが、現状では十分に評価されているとは言いがたい場面が見られることである。保護者に対して説明する際にも、このような情報を提供する必要が今後はあるだろうとしている。

論文の評価

第 1 に、英語教育学研究の分野では、就学前教育における英語教育はこれまで比較的関心が薄い分野であったと言える。五十嵐氏の本論文は、そのような中で、就学前教育における英語教育の現状について、包括的な調査を実施したもので、今後のこの分野の基礎となる研究であると言える。研究課題として掲げた 5 つの領域((1)幼児教育の現場で実施されている英語活動、(2)幼稚園教諭及び保育士が持つ英語活動及び英語への意識、(3)幼児教育の現場に携わる保育者(管理職を含む)や英語教師が持っている幼児期の英語教育への考え方、(4)保育者養成校の学生が持つ就学前教育における英語教育への意識及び英語への意識、(5)保護者の持つ就学前英語教育への意識)を 1 つ 1 つ調査していくことで、現在の日本の就学前教育における英語教育の全体像が見えるようになったことは価値のあることであると考えられる。

第 2 に、2020 年度から実施された小学校学習指導要領では、それまで小学校高学年から「外国語活動」として必修化されていたものが、小学校中学年から導入され、さらに小学校高学年からは「外国語科」として教科化されている。外国語(英語)学習の早期

化の流れが今後どのように進んでいくのかはまだ見通せない部分もあるが、外国語(英語)教育に対する保護者の関心の高まりは今後も続いていくものと考えられる。五十嵐氏の今回の研究は、このような流れを先取りするものとして、将来のいわゆる「幼小連携」の中での英語教育のあり方を考える上で貴重な研究であると考えられる。

一方で、今後の課題として、今回の研究は就学前教育における英語教育の実態を量的・質的に記述しようとした試みであったが、次の段階として、就学前教育における英語教育ではどのような内容が行われるべきなのかということを理論的に考察することも必要になってくると考えられる。小学校英語教育が本格的に始まった時に、それまで中学校・高等学校で行われていた英語教育のどのような部分を小学校英語教育で導入し、また、児童に教えるためには方法論としてどのようなものが適切であるのかが議論されたが、それと同様のことが就学前教育における英語教育でも今後必要になるかもしれない。本論文の成果が、そのような形でさらなる貢献ができることが期待される。

以上の点を総合的に考慮して、審査委員会は五十嵐淳子氏によって書かれた本論文に対して博士号を授与することが適当であると判断した。